No.163

健康教育®

— 健康なくして教育はありえない —

◎ 祖父母との関わりのなかで
育まれる子どもの心
…… 棒田　明子
◎ 子どもと本 …… 赤木　かん子

「健康教育®」

――健康なくして教育はありえない――

1911年、河合グループ創業者である薬学博士・河合亀太郎がかかげた企業理念です。

薬学博士・河合亀太郎

こどもたちのすこやかな成長を願い、より一層お役に立てる情報のご提供・ご提案を目指し、発刊致しております。これからも、創業者・河合亀太郎の理念「健康教育」を大切に伝え続けてまいります。今後ともご愛読のほどよろしくお願い致します。

目　　次

3	祖父母との関わりのなかで育まれる子どもの心
9	子どもと本
15	あらまし

表紙：峰岡幼稚園（神奈川県　横浜市）

祖父母との関わりのなかで育まれる子どもの心

NPO 法人孫育て・ニッポン代表
ウエブサイト「孫育て上手」
編集長
棒田　明子

父の死が教えてくれた祖父母と孫の関係

今から約 10 年前の出来事です。私の母から 1 本の電話がかかってきました。「お父さんが倒れた。ダメかもしれない……」。当時私は神奈川県横浜市に住み、両親は千葉県松戸市に住んでいました。長男は小学校 2 年生、二男はまだ 4 歳。電話をもらってすぐに病院へ駆けつけたのですが、間に合わず父は 1 人で天国へと旅立ってしまったのです。

長男とおじいちゃん、それはそれは仲のよい 2 人でした。いっしょに散歩をしたり、遊んだり、ときには何かを作ったり。父にとっても、私の 2 人の子どもたちにとっても、その時間は至福の時間だったように思います。そんな仲良しのおじいちゃんの突然の死。二男は半信半疑でしたが、長男はおじいちゃんの死をどうやって受け止めたらいいのか、ずっとあえいでいました。病院から父の遺体を自宅へ移動するときにも、遺体から離れることができず、遺体を運ぶ車に一緒に乗せていただいたくらい。自宅に帰ってからも、「隣に寝る！」と言ったのを今でも強く覚えております。そんな息子の姿を見て私は、短かったけれど 2 人はとても良い時間を一緒に過ごすことができて本当に良かったと思いました。

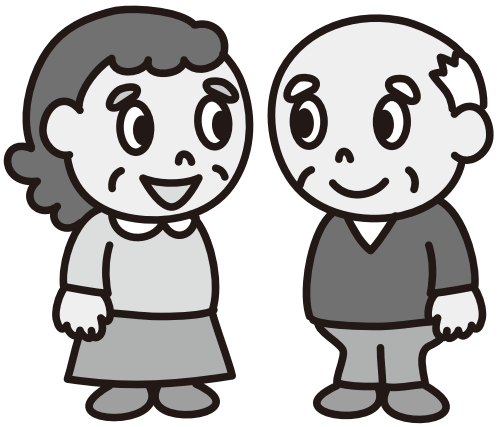
父と息子たちの関係は、決して特別ではなく、私はごく普通の「祖父母と孫」の関係だと思っておりました。けれども、実は「祖父母と孫の良い関係」を作るのは以外と難しいことに気が付いたのです。父の死の後に、同世代のとあるママが「うちの息子は、ダンナのお父さんが亡くなったときに、『お年玉とか、プレゼントをくれる人が 1 人減っちゃったなぁ〜』って言ったのよ。まぁ私がダンナの両親とあまり上手くいってなくって、ほとんど顔も見せなかったからしょうがないんだけど。でも、ぼうださん家のお兄ちゃんの姿を見たら、息子に悪いことしちゃったかなぁって、ちょっと反省しているんだ」と話してくれました。そのとき私ははじめて「親と祖父母の関係性」により、孫が祖父母からもらう愛情に違いが生じることに気が付きました。

祖父母世代との世代間ギャップから生じるトラブル

祖父母と親の関係性が悪くなる原因は何か？ 自分の経験も含め、いろいろなことを検証していくと、赤ちゃんのお世話やしつけなどの問題で悪化する場合が多いことがわかりました。その大きな原因は、世代間ギャップです。「赤ちゃんが生まれる」その報告を聞いて祖父

母世代がイメージするのは、自分自身が行った子育て。そして、ママ・パパが情報収集するのは最新の子育て情報。そこには 30 年以上の時間が流れています。子育て、しつけなどは、時代が変わっても変わらないものもありますが、科学・技術の進歩で大きく変わったものもあります。

祖父母世代は、母乳よりもミルクで育てたほうが頭が良く、丈夫な子どもが育つと言われていましたが、現代は免疫力や母胎の快復などの面からも、母乳の方が赤ちゃんには良いと言われています。また、乳児期の栄養、水分補給は母乳でまかなえることから、白湯や果汁は必要ないとも言われています。パパ・ママは親世代の子育てを知らず、現代の情報しか知らないので、親の言うことに疑問を持ち、ときには反感を持つこともあるようです。祖父母の方も「ちっとも言うことを聞かない」「今のやり方はちっともわからない」とパパ・ママの話に耳を傾けない場合が多いようです。両者は違うことを言っているように見えますが、実は根底はどちらも「赤ちゃんが健やかに、幸せに育って欲しい！」という同じ思いから生まれているのです。それなのにトラブルになってしまう。なかには関係が断絶してしまうこともあるようです。



孫は祖父母から愛情をもらう権利がある

生命の誕生。お父さんがいて、お母さんがいて、そして両家のおじいちゃん、おばあちゃんがいる。当たり前のようですが、この中の誰か 1 人でも欠けてしまったら、もっと言えばご先祖さまの誰か 1 人でも欠けていたら、赤ちゃんの誕生はあり得ないのです。そして、新しい小さくて弱い命は、決して欠くことのできない人から「愛情」をもらう権利があります。これは親と祖父母との関係により左右されてはならないものなのです。

でも、核家族化が進んだ現代では、親が意識しないと、祖父母との関わりはお金やプレゼントだけの関わりになってしまうこともあります。子どものためにと、習い事に通わせたりするパパ、ママの姿は多数見受けられますが、毎日の暮らしの中で「子どものために祖父母との関わりを大切にしよう」と意識している親の数は決して多くはありません。祖父母との関わりが少なければ、子どもたちが祖父母からもらえる愛情は、減ってしまいます。また、関係性が悪くなり、ほとんど顔を合わすことがなくなってしまうと、本来ならば両家 4 人の祖父母からの愛情をもらえるはずが、半分になってしまうのです。

祖父母の役割

祖父母が一緒に子育てをする動物はまれです。サルなど霊長類の群の中に祖父母はいますが、あまり子育てには関わりません。そもそも孫が生まれるまで生きている生物が決して多くはないのです。では、何故人間の寿命は他の動物に比べて長いのでしょうか。

私は生物に詳しくはないのですが、「生きている意味がない生物は命を失う、機能を失う。

逆に意味があれば生き続け、生きるために進化していく」という話を聞いたことがあります。人間の寿命、とくに日本人の寿命が延びたのには、もちろん医療の進歩もありますが、「生きる意味」があるからではないでしょうか。

「祖父母の生きる意味」、それがまさに「祖父母の役割」ではないかと思います。祖父母の役割は各家庭の環境により大きく異なりますが代表的なものとしては、「孫の心のオアシスになる」「親のサポーターになる」「文化を継承する」「生きる、老いる、死を孫たちに伝える」ではないかと思っています。

孫の心のオアシスになる

核家族化が進んだ現代の中で、一番気になることは「子どもたちの逃げ場」がなくなってしまったこと。テレビ番組『サザエさん』では、タラちゃんがサザエさんに怒られると、おばあちゃんやおじいちゃんのところへ行く場面がよく見受けられます。でも、核家族の家庭では逃げ場がないのです。家の中ならトイレ、顔を合わせるのもイヤになった場合は、外に飛び出すことになるでしょう。

祖父母の役割は、外へ飛び出す前のワンクッション。親に怒られたことを祖父母に話すことで気持ちが落ち着く、祖父母がかばってくれたことで満足するなど、幼い心を受け止めてくれる人、場所が子どもたちには必要なのだと思います。

一緒に住んでいない場合は、その場ですぐにと言うわけにはいきませんが、夏休みやお正月などに会ったときに「おばあちゃん、この間お母さんたらね……」と親の悪口を言えたり、親には言えないことを言える人がいることが、子どもたちの心を癒してくれることでしょう。

親のサポーターになる

昨年「イクメン」という言葉が新聞などでも取り上げられ、男性の育児参加も昔に比べてずいぶんと積極的になってきました。国をあげて男性の育児休暇の取得率を上げようという動きもあるくらいです。それでもまだ女性の育児負担は重く、ストレスを抱えている母親が多いのには変わりありません。また、出産後も働く女性が増えているのに、保育園や学童保育所などの整備が遅れ、希望した全員が保育園や学童保育所に入れないのが現実です。子育てのストレス、子どもを預けたくても預ける先がない、そのような親にとって祖父母のサポートは本当にありがたいものでしょう。また、パパ･ママのサポートをすることは、パパ･ママの希望だけでなく、祖父母世代の人の役に立ちたいという希望もかなえることができます。

文化を継承する

現代の暮らしは、とても便利になりましたが、失われてしまったものも多くあります。地域の文化、家庭の文化、食文化、子どもたちの遊び文化など、祖父母世代が子どもの頃には残っていたもので、現在の社会の中では失われてしまったもの、または失われつつあるものなど、子どもたちに伝えていただきたいと思います。

生きる、老いる、死を孫たちに伝える

そして、４つめの祖父母の役割は「生きることの素晴らしさ」「生きることの楽しさ」を伝え、「老いていく姿を見せ、身をもって命の尊さ、大切さを伝える」こと。これは祖父母にしかできない、一番重要な役割ではないかと思います。

小学生の将来の夢に「犬になりたい」と書いた子どもがいるとの報告を、５年ほど前に受けました。「どうして犬になりたいの？」と先生が聞いたら、「犬は勉強も、家のお手伝いも何もしなくていい。大人になっても働かなくてもいいでしょ。それに、怒られないし、みんなにかわいがってもらえるから」とその小学生は話したそうです。子どもと言うのは夢に満ちあふれていて、大人が考えたら絶対に無理と思うような夢を、目をキラキラさせながら描いているものと思っていましたが、現実の小学生に少しずつ変化が見られています。それは、どうしてなのか？　大人になることに夢を描くことができない子どもたちが増えている、言い換えれば今の大人たちが子どもたちの憧れの存在になっていないということではないでしょうか。もっと大人たちが生き生きと楽しそうに毎日を送っている姿を子どもたちが目の当たりにしたら、きっと子どもたちも変わってくるでしょう。子どもたちの将来のためには、まずは大人たちが生き生きと輝く姿を見せることもとても大切です。正直パパ・ママは、毎日忙しく、子どもから見たら「大人になることは大変だ！」と思うことが多いと思います。だから現役を引退し、少し余裕がある祖父母世代が「大変なこともあるけれど､生きていると、じぃじのようにいいことがあるよ」と孫たちに話してくれたら、子どもたちも大人になること、年を重ねることにあまりマイナスイメージを持たなくなるのではないでしょうか。

それと同時に、「老いていく姿」を見せるのも祖父母の重要な役割です。近年、社会福祉環境が整備され、日本全国には高齢者施設が数多くできました。その結果、老人は家庭で家族と一緒に過ごすのではなく、高齢者だけの特別な世界で生活することが多くなりました。地域でも、高齢者の送迎車が走っているのをよく見かけ、家族と一緒に生活している高齢者でも、日中はデイケアセンターで過ごす人が増えています。社会が変わって、町の中から消えた光景があります。それは杖をつきながら散歩したり、買い物をしたりする高齢者の姿です。

イマドキの子どもたちのなかには、高齢者の姿を見ると「汚い！　キモイ！」と言って逃げる子がいます。自分たちも同じように高齢者になることがわかっていないのでしょうか。家族の負担を減らし、高齢者も快適に過ごせるようにと高齢者施設は作られたのですが、子どもたちが老いに触れる機会を奪ってしまいました。

葬儀の場所も自宅から葬儀場に変わりました。自宅で葬儀を行っていたときには、花輪や黒白の幕など、その家の前を通れば誰が亡くなったかがわかり、葬儀に参列する機会も子どもたちにもあったのですが、現在は葬儀場で行うために、どこの誰が亡くなったのかも

わからず、「うるさくすると、周りに迷惑になるから」と葬儀に参列させる親も減り、子どもたちが「死」に触れる機会が以前に比べ激減しました。霊柩車も昔ながらの霊柩車はあまり見かけられなくなり、私が子どもの頃にあった「霊柩車を見たら親指をかくす」といった遊びも存在しません。

他人の「老い」「死」を受け入れることが難しい子どもたちでも、自分に愛情を注いでくれた祖父母の「老い」は、受け入れることができます。良い関係性を築くことができた祖父母と孫との間には、祖父母が年老いたときに、祖父母のゆっくりとした歩みに寄り添い、階段などでは手を貸すなどが自然にできる孫が多いようです。自分の子どもたちが祖父母にやさしく接する姿を見て、「ウチの子どもたちにもこんなにやさしい心が育っていたんだ」と思わず涙がこぼれたというママもいらっしゃいました。他人の「老い」「死」を受け入れるには、まずは身近な人の「老い」「死」経験することが、子どもたちには必要なのです。

支え合って生きていく

人は、人という字が示すように、支え合いながら生きていきます。一人では生きていくことができません。その支え合いを学ぶ最初の場所が「家族」であり、「祖父母と孫」の関係ではないかと思います。支え合いは家族だからできるものではなく、人と人との間に愛情が生まれ、優しい心が育まれたときに生まれるものだと思います。愛情が一番生まれやすいのが家族の中でも「祖父母と孫」の関係。「目の中に入れても痛くないほどかわいい」と孫のことを表現するくらい、祖父母にとって孫はかけがえのない存在です。その愛情をたっぷりと受けることで、孫たちの心に少しずつやさしさ、いたわりの心が芽生えてくるのでしょう。

単一世代の中で成長する子どもたち

現代の子どもたちの特徴のひとつに、同世代のつながりが非常に強く、他世代とのつながりが弱い傾向があります。母親の妊娠期の両親教室に始まり、赤ちゃん会、赤ちゃんサークル、保育園、幼稚園、小学校、中学校、高校、大学と、すべて 1 学年単位での生活がそのほとんどをしめています。けれども高校、大学を卒業し、社会に出ると、18 歳から 65 歳、なかには 70 歳以上の方ともお話をしなければなりません。

ニュースや新聞でも「日本人のコミュニケーション能力が低い」と話題になっていますが、現在の子どもたちの育つ環境は、コミュニケーション能力が育ちにくい環境にあるのです。

家族・親族構成も、戦後大きく変わっています。団塊世代の出生率は 4.32、兄弟が 4 人以上ですが、2010 年は前年よりも少し増えたとはいっても 1.39 と、一人っ子が多い。団塊世代の方のいとこの数は、10 人以上という方が多いのですが、現代の子どもたちのいとこの数は激減しています。一人っ子同士が結婚すると、いとこはいません、いとこの両親であるおじさん、おばさんもいないのです。お正月やお盆、結婚式や法事のときなどに親戚一同集まり、いろいろな人と出会う機会も、今の子どもたちは失ってしまいました。

「地域の祖父母」「地域の孫」

少子化により、血縁関係での人との出会い、コミュニケーションが減ってしまった子どもたちに、何か良い方法はないのか。また少子化の裏に隠された『祖父母になりたいけれどなれない人』たちに、生きる喜び、孫と接する喜びを経験してもらうことはできないだろうかと考え、現在活動を広げているのが、血縁関係の祖父母

と孫の関係だけでなく、地域社会の祖父母となる「イクジイ」「イクばあ」です。地域の祖父母と孫をつなぐことで、育児ストレスに悩む母親のストレス解消、ご両親が近くに住んでいない家庭の育児負担の軽減にもつながります。「遠い親戚よりも近くの他人」という諺があるように、これからは血縁関係だけでなく、「地域の祖父母」「地域の孫」を持つことがカギとなることでしょう。

「地域の祖父母」「地域の孫」がつながることで、地域の防犯、防災にも役立ちます。3月11日におきた東日本大震災では、避難所に避難した子どもたちと親が会えるまでに3日以上もかかった親子もいました。その間一緒に過ごしたのは、地域の祖父母世代の方が多かったようです。仕事を持つ母親が増えれば増えるほど、地域に残るのは乳幼児とその母と、小・中学生、そして祖父母世代です。「地域の祖父母」「地域の孫」としてのつながりができていれば、「お母さん、お父さんが来るまで、おじさんと一緒に待っていよう」と、顔見知りの方と安心して過ごすことができますが、もしもつながりがなかった場合は、一人寂しく待つことになるのです。

「地域の祖父母」「地域の孫」をつなげるには、保育園や幼稚園、小・中学校、町内会などが中心となって進めていくことが望ましいでしょう。最近では保育園、幼稚園などでも祖父母参観などが行われていますが、自分のおじいちゃん、おばあちゃん以外に、近所のおじいちゃん、おばあちゃんにも、子どもたちから招待状を送ることができるようにするのも、つながりを作るきっかけになるかもしれません。

赤ちゃんは
トリプルハッピーの使者

私は「孫」（含む「地域の孫」）のことを「トリプルハッピーの使者」と呼んでいます。トリプルハッピーとは、2者の関係に1プラスされることで、2者だけの時よりもハッピー指数が上がることを言います。親と子どもの2者の関係に、赤ちゃんが加わることで、3者の関係になり、そこに今まで以上のハッピーが生まれる。そして、3者が良い関係を築くと、3者それぞれのハッピー指数がどんどん上がっていきます。

私たち大人は、子どもたちの学力を伸ばすことに偏りがちですが、一緒に生きていく人を思いやる気持ちを育てることがとても重要だと思います。思いやりの心、やさしい心、いたわりの心は、教科書を読んだり、親から「やさしくしなさい」と言われても育つものではありません。人と人とのつながりの中で受けた愛情、やさしさが、育んでいくものだと思います。

子どもたちの力を借りて、トリプルハッピーの化学反応を家庭で、地域で起こし、「思いやり」のある子どもたちを育てていきましょう。そのためには、まず家庭の中の祖父母とのつながり、地域での祖父母世代とのつながりを見直す必要があります。

祖父母と会う機会を増やす、会えないときは電話をする、手紙を書く、近くに住んでいなくても、できることはたくさんあります。また、地域でも小さい子どもに声をかける、町内会の行事に参加する、地域の祖父母世代に保育園や幼稚園などの行事を手伝ってもらうなど、地域でのつながりをつくる方法もいくつも考えられると思います。

祖父母と孫との蜜時には、タイムリミットがあります。ぜひ、今日からできることを始めてみましょう。

子どもと本

児童文学評論家
赤木　かん子

子どもと本、について考える時、私はまず年齢で区切ります。

子どもたちと常日頃つきあっている皆さんは重々ご承知だと思いますが、人間、小さな頃にはできないことや理解できないことが山のようにあるものだからです。できないことはできないんですよね。

8ヶ月くらいの子どもたちへ

というわけで、まずは8ヶ月くらい…ここは個人差がたいそうありますが…以下のお子さんから考え始めます。そういうと、「ええっ？そんな小さい子は、本はわからないんじゃない？」と必ずいわれるのですが、保育の専門家である皆さんはそんなことない、というのをよくご存知だと思います。

人間は、ひどく賢いのです。人間は初めから、不愉快だと思えば泣くことを知っています。口に嫌いなものを突っ込まれれば嫌がってべーっと出します。

本の絵を見せて（べつに絵本の形をしていなくても、ただのチラシでもいいのですが）「ほらニャーニャーよ」というと、本物とは違うけど、それを猫だという認識ができるのです。赤ちゃんは、もう抽象的な思考ができるのです。もちろん、だからといって長い物語を理解できるわけではないですから、赤ちゃん絵本というのはほとんど1ページ完結でできています。

いままでに見聞きした中で一番年齢の下のお子さんは、3ヶ月で、かがくいひろしの「だるまさんが」という本にきゃっきゃっ、と笑って喜びました。これは2ページ見開き完結タイプで、開くごとに“だるまさんが　ぷっ”というようなセリフが入っています。（だるまさんシリーズは全部で3冊。うち2冊がビックブックになっています）

「だるまさんが」
かがくいひろし／さく
ブロンズ新社

「ぴょーん」
まつおかたつひで／さく
ポプラ社

それから「ぴょーん」――。（これも手のひらサイズとビックブックと両方あります）

これは1才未満の赤ちゃんから7才くらいまでの子どもを惹きつける、不滅の名作です。

1ページ目で“カエルが”――。　2ページ目で“ぴょーん！”と飛ぶのです。これをビッ

クブックで読んであげるとたいていのお子さんは、跳ねます（笑）。７才くらいでも！

この本は７ヶ月くらいになればほとんどのお子さんにうけます。人間の子どもはたった７ヶ月で、１ページ目と２ページ目が連動しているのだ、ということがわかることになります。

でも、７ヶ月くらいまでの赤ちゃんが、なにをどのように、なぜ？気に入るかはまったくわかりません。それは本人にきいてみるのが一番です。本がたくさんあるところに連れて行って、どれがいい？ときくのが一番正確で簡単な方法です。そういうと必ず、「そんな小さい子に本が選べるわけがない」といわれるのですが、選べますとも！嫌いな食べ物がわかるのです。嫌いな本だってわかりますよ。

子どもの本の選び方

どれがいい？ときいたら、好きな本に手を出します。でもそういうと、たいていの本には素人の親御さんはええ～、と不満そうな声を出します。なぜか…。たいていの親御さんは、専門家が素晴らしい、という本をお子さんに読ませたいのです。もちろん、本として素晴らしい、そうでもない、という差はちゃんとあります。でなければ文学評論なんて成り立ちません。でも、芸術として素晴らしい本がイコール面白い本か？　読みたい本か？ということになると、どうでしょう？そのときの気分だってあります。もし、仮にあなたが毎日毎日これは素晴らしい本なんだから（それには異論はありませんが）「戦争と平和」や「罪と罰」を読め、といわれたら、どんな気持ちがしますか？

そもそもいったいなんのために赤ちゃんに本を出すのでしょう？

それはそのお子さんに“幸福になってもらいたい”からです。だれだって、赤ちゃんが生まれたら、可愛いと思い、あやしてやりたくなるでしょう。大人はガラガラが楽しいわけではありません。大人同士、ガラガラをふりあうことは、まずないでしょう。でもふってやると、赤ちゃんがきゃっきゃっといい顔をして笑ってくれるから、その顔が見たくて大人はガラガラをふるのです。

もしそのときに赤ちゃんが泣き出したら、まともな大人だったら「ごめんごめん、びっくりした？」といって抱き上げてあやしてやるでしょう。そのときに赤ちゃんに、「私がせっかくこの優れたガラガラをお前に与えたというのに、それを喜ばないとは何事か！」といって怒る大人がいたら、それは大問題です。そういう態度は赤ちゃんのすこやかな成長を阻害してしまいます。

本も、ガラガラと同じです。本人が読みたいものを、読みたいように読めばいいのです。

でも、子どもたちはまだ文字が読めない…。あの小さい黒いポツポツを、ことばにしてくれないと、中味が読めないのです。だから読んでもらう必要がある…。

いい年の大人が１才や２才の子と、同じ本を見て楽しいはずがないのです。だってもう大人なんだもの。大人には大人に面白い本のほうが面白いに決まっています。まずは子どもたちに読んであげる本の中身を自分も楽しもうとするのは、やめましょう。逆の方向からいえば「あなたが面白い、と感じる本を読んでやりたい」と思うのをやめましょう。子どもが楽しいと感じるところと、大人が楽しいと感じるところは違うのです。あなた、ではなく、子どもたちが楽しい、と感じる本を子どもたち自身に選んでもらいましょう。

そうすると、たいていの大人には気に入らない本を子どもたちは選んできます。でもなぜ気に入らないかというと、それは“自分が楽しくない”からなのです。ほとんどの女性は戦隊ものが嫌いです。ですからお子さんがそういう本を選ぶと嫌がりますが、お父さん

たちは…戦隊ものが嫌いじゃないのです。自分も好きで、楽しいのです。ですから仮面ライダーのコインだって、いそいそ買ってやります。

子どもと成長する

子どもを育てると成長する、といわれます。でもそれは、子どもを一人の人格として尊重したら、の話です。自分の思い通りに動かしたい、と思っているうちは成長しません。相手の言い分にも耳を傾け、お互いに正しい距離を取り、世の中は自分の好みではまわっていないことを受け入れられるようになったら大人でしょう。あなたの好みも正しい。でも、相手の好みも正しいのです。

ですから大人は、延々と朗読マシーンになります。あの黒いポツポツを、声にして立ち上げてくれないと、本の中に入ることができないからです。そうして本の中身ではなく、読んでもらってうわあっ、といってほっぺたを輝かせている、子どもたちの笑顔を楽しみましょう。そう、ガラガラと同じように。

その子どもたちは幸福です。そうしてその幸福感は、だれでもない、あなた！が子どもたちにあげたのですよ。それは、素晴らしいことではないでしょうか？何を読んでいるか、ではなく、どこまで深く楽しませているか、が大事なのです。なぜならば、子ども時代に幸福だった人間は、大人になって強い丈夫な大人になるからです。

子どもたちには１才未満のときから好みがあり、これを見たい、これは見たくない、とはっきり意思を言います。周りの大人が聞く耳を持ってさえすれば。そうしてなんでもいい、むちゅうになれるもの、好きなものがある人間は幸福です。それを見ている間は簡単に幸福になれるのですから。

１才を過ぎた子どもたちへ

１才を過ぎる頃になると、急速にいろいろなことがわかるようになります。好みもはっきりしてきます。電車の本が好きな子、恐竜が好きな子、昆虫が好きな子、戦隊ものが好きな子。なかでも３才頃までのお子さんを魅了してやまないのは、不朽の名作「アンパンマン」でしょう。なぜ、そんなにもあのパン男がいいのか、おそらく作者のやなせたかしさんもおわかりではないのではないでしょうか。わかっていることは、子どもたちがアンパンマンを好きで好きでたまらない、ということ、そしてアンパンマンをみていると幸福なのだ、ということだけです。だったらありがたく幸福にさせておきましょう。

それに「アンパンマン」のどこが悪いというのでしょう？それは絵画的に優れているか、といわれたらピカソにはかなわないと思いますが、絵本という媒体は“絵が素晴らしいイコール面白い素晴らしい絵本”になるわけではありません。マンガが、“絵がうまいイコール面白いマンガ”になる、というわけではないのと同じです。絵がうまくなくても魅力的な絵本はたくさんあります。

アンパンマンの欠点は、強いて言えば、子どもたちに絶大な人気を誇っていることではないでしょうか？たいていの大人は自分が見て面白くないと不安になるのではないでしょうか。自分に理解できない世界に子どもがいるのが怖いのではないでしょうか。でも、その大人の知っている世界、好みの世界に子どもを閉じ込めておくわけにはいかないのです。それぞれみんな好みが違うのですから。趣味が違っても夫婦はできます。でしたら、趣味が違っても、親子もできると思います。

自分と興味が違っても、自分は朗読マシーンだと思い、向こうが読んで〜、という本をはい

はい、と読んであげてください。読んでもらうまではその本が面白いか面白くないかはわからないものです。読んであげて子どもが面白くないといったら、二人でガッカリ、すればいいのです。面白かったら喜べばいい。全部がご馳走だとあきますよ。時々はつまらない本もないと、面白い本が面白いんだということがわからなくなってしまうでしょう。

子どもたちには失敗する時間がたっぷりあります（大人にはもうそんな余裕はないですがね）。いろいろな本を用意して（図書館の力を借りるとよいでしょう）子どもたちに選択権を渡してください。戦隊ものでも仮面ライダーでも、ディズニーでもジブリでも結構！自分の好きなものをお母さんも先生も支持してくれる、ということはとりもなおさず自分を支持してくれる、ということになります。優れた本を読むよりもこの年代では、そちらの自信がつくほうが優先順位としては上でしょう。

あるとき本屋さんで“おしゃまさん”を見ました。ちょうど３歳くらいで、彼女はシンデレラに執着していた…。一緒にいたお父さんは「お前はもう、シンデレラなら何冊も持ってるじゃないか」というもっともな意見を述べました。でも彼女はそこで「でも、このシンデレラは持ってない」と言い張り、その論理の正しさに負けて、ついに彼女はその本をゲットしました。まぁそのときのうれしそうな顔ったら！

自分で選ぶんだよ、というと、みんな誇らしげに選びます。それこそが自由と自立と人間としての尊厳の第一歩、だと思います。自分の選択を認めてもらえる、ということが…。

３才を過ぎた子どもたちへ

そうして３才過ぎるとこれはもう！たいていのストーリーものはわかるようになります。３才からだいたい８才までは８割くらいは同じ本が使えるようになるので、もうここのところは何千冊も本がある、ということになります。

そうしてこのあたりで恐怖の繰り返し読みの季節がやってきます。同じ本を繰り返し繰り返し何十回も読んで～、とやってくるので、相手をする大人は本当に大変ですが。これは必要な通過点です。本を読んでいるのだ、と思うからつらいので、これは灯油ストーブのタンクに灯油を入れているところ、と思ってください。馴れてくると、あと５回読んだらおさまるな、というのがわかってきます。そうしたら、灯油のポンプをあと５回、しゅこしゅこしゅこしゅこしゅこ、とするんだと思ってください。そうすれば腹も立たないでしょう。

なんでこの本に？と思うのは無駄です。なにせ、本人にもわかってないからです。大きくなったときに、恨みがましく、あなた、これ好きだったよねえ、といってみると、懐かしいなあ、とはいいますが、本人自身、何でこの本にはまってたんだろう、と思う本が少なくないのです。ここで大事なことは「はまれた本があること」「満足できるまで読んでもらえたこと」なのです。どんな本か、はどうでもいいのが不思議なところです。

リアル系と空想系

あと、ここでわかっていただきたいことがもうひとつ…。本、には“リアル系”と“空想系”があります。この世に本当に起きることが“リアル系”で、誰かの妄想、嘘っこ、ほら話、が“空想系”です。

そうして、いま子どもと本に関わりたい、とおっしゃってくださる方は、その“空想系”の情緒たっぷりの物語、を読んでやりたい、与えたい、と感じてらっしゃるかたがたが大多数なのですが…。

男子のおよそ８割ほどは“リアル系”の好きなひとたちです。この世に本当にあること、電車、昆虫、恐竜、そうして戦隊も仮面ライダーも実際にはいませんが、この世に本当にあることとないことの区別がつくのには３年生までかかるので、彼らにとってはサンタクロースもライダーも本当にいる！リアル系の本になるのです。

ですから低学年のうちはよく絵本もきいてくれるけど、４年生過ぎると一気に本離れが進む、といって嘆く方がいらっしゃいますが、なにも本が嫌いになったわけではない…本当に起きることとそうでないことの区別がつくようになったので（つまりは成長したので）嘘っこの嫌いなグループが、単に好みじゃない、といって文学から離れていっただけなのです。そういう好みの人はたいていが空想系は理解できない、つまらない、興味がないのです。でも、頭が悪いというわけではありません。ノーベル化学賞もらうような人たちはみなリアル系です。科学者は、というか、学問は実際にあることなので、自然科学も経済学も、歴史も、学者、というひとたちは、ほぼリアル系なのですよ。女子も（数えたことはありませんが）おそらく６割ほどはリアル系のように思います。だからそういうひとたちはリアル系の本なら読みますよ。今の一番人気は「元素図鑑」です。セシウムとか、プルトニウムとかの説明が出てますからね。ちょっと先走りすぎました。

でも、同じように３才の人たちの大部分もリアル系です。ただ、現実に起きることとそうでないことの区別はまだつかないし、その不可思議な感覚でシュールな空想系も、楽しむことができるのです。どうぞ子どもたちにリアル系の本も見せてください。昆虫図鑑や宇宙の本など、ビジュアルが美しければ美しいほど、それは５才前後の子どもたちのものです。「デイビッド・マリンの驚異の大宇宙」は18,000円もする大人の本ですが、公共図書館で児童室に出しておけば、借りて帰るのは幼稚園児です。

二見書房の「ウミウシ」も。マレントの超絶写真集の「蝶」や「熱帯雨林」も緑書房の「ヘビ大図鑑」も、ビジュアル系は美しさ、と値段がほぼ比例するので。あることさえわかれば、年長さんたちがいそいそ借りて帰るのです。重いのを。

「デイビッド・マリンの驚異の大宇宙」
デイビッド・マリン著
ニュートンプレイス

子どもたちの感性

かつ小学校の２年生くらいまでは、人がやっているのを見て、自分もやったと錯覚できる、驚異の共感能力を持っています。これがあるので３、４、５、６歳児さんたちに本を読んであげるのは楽しい。

あるとき幼稚園の年長さんにバートンの「うちゅうひこうしになりたいな」を読んでくださった人がいました。読み終わったあと、あなたたちもいつかはうちゅうにいきたいよねえ、といったところ、ええ～っ？いまいってきたじゃん！と合唱され、負けました～、と笑いながら帰ってこられました。

「ティモシーとサラのふゆのおくりもの」という絵本のなかには大きなクリスマスツリーが描いてあります。これを大きくしたら、たぶん子どもたちはこの木の下に座るだろうな、と思いました。というわけでビッグブックを作ったのですが、思ったとおり、子どもたちはティモシーとサラと一緒にツリーのしたに座りました。そのときに一緒に見ていると、大人も連れて行ってもらえます（笑）。この共感能力は３年生を過ぎると急速に失われていきます。

それまで…8 才までの子どもたちの感性は大人とはかなり違っていて、それが大人には不思議でもあり、楽しくもあるのです。肝心の子どもたちは大真面目なので、大人たちが笑ったりすると不愉快になるのですが。

子どもたちに本を読んであげるのは楽しいです。大人とは違う反応が返ってきて、本当にそうだ、この本はそういう風にも読めるんだ、というような新しい発見が、大人同士では見つけにくい発見がたくさんあり、世界が豊かに広くなるからです。

何冊か、年長さんが楽しめる本のリストをつけておきました。どうぞ本ではなく、子どもたちの反応を、幸福感を楽しんでください。

「うちゅうひこうしになりたいな」
バイロン・バートン作
インターコミュニケーションズ

「ふゆのよるのおくりもの」
芭蕉みどり作
ポプラ社

年長さんが楽しめる本のリスト

「給食番長」	よしながこうたく／さく	長崎出版
「こびとづかん」	なばたとしたか／さく	長崎出版
「まないたにりょうりをあげないこと」	シゲタサヤカ／さく	講談社
「おなべおなべにえたかな？」	こいでやすこ／さく	福音館書店
「うんちっち」	ステファニー・ブレイク作	PHP 研究所
「だるまさんが」	かがくいひろし／さく	ブロンズ新社
「ほね、ほね、きょうりゅうのほね」	バイロン・バートン作	インターコミュニケーションズ
「まくらのせんにん」	かがくいひろし／さく	佼成出版社
「ハンダのびっくりプレゼント」	アイリーン・ブラウン作	光村教育図書
「アカメアマガエル」	ジョイカウリー著	ほるぷ出版
「実物大恐竜図鑑」	デヴィッドベルゲン著	小峰書店
「ダンゴムシみつけたよ」	皆越ようせい写真・文	ポプラ社
「ありとすいか」	たむらしげる著	ポプラ社
「くろずみ小太郎旅日記」	飯野和好著	クレヨンハウス
「トトトのトナカイさん」	長谷川義史著	プリンズ新社
「うえきばちです」	川端誠著	BL 出版
「ぴょんたのたいそう」	ルースティルデン著	大日本絵画
「てじな」	土屋富士夫 作	福音館書店
「ぼくはざりがに」	武田正倫・飯村茂樹	ひさかたチャイルド
「はたらくくるま」	バイロン・バートン著	インターコミュニケーションズ

■執筆者紹介

棒田 明子（祖父母との関わりのなかで育まれる子どもの心）

NPO法人孫育て・ニッポン代表。育児サイト「ユウchan」「孫育て上手」の編集長。NPO法人 ファザーリング・ジャパンのスタッフ。童具館・童具アドバイザー。NHKラジオビタミン、子育てインフォレギュラー。著書に『祖父母に孫をあずける賢い100の方法』（岩崎書店）『おまごブック』（社）日本助産師会など。雑誌、新聞への執筆、全国各地での講演多数。現在は、孫育てだけでなく、子育てが、「個育て」から「多育て」に変わるよう、さまざまな団体と協力してプロジェクトを推進している。

赤木 かん子（子どもと本）

児童文学評論家。長野県松本市生まれ、千葉育ち。法政大学英文学科卒業。1984年に、子どもの頃に読んでタイトルや作者名を忘れてしまった本を探し出す「本の探偵」として本の世界にデビュー。以来、子どもの本や文化の紹介、ミステリーの紹介・書評などで活躍している。著書に「調べ学習の基礎の基礎」(ポプラ社)「かならず成功する読みきかせの本」(自由国民社)など多数。図書館を中心に講演活動も多い。(講演内容：読んでほしい、読んであげたい、一緒に読みたい子どもの本)など。

■協力園

峰岡幼稚園（神奈川県　横浜市）

■「健康教育®」あらまし

こどもたちのすこやかな成長を願って創刊された季刊誌「健康教育®」。
1956年の創刊以来、創業者・河合亀太郎の信念を伝え続けております。
読者対象/日本全国の小中学校・幼稚園・保育園の学校長や園長を始めとする先生方・保健主事・養護教諭・給食関係者など。

平素より「健康教育®」をご愛読頂きまして、誠にありがとうございます。
編集部では、皆様のお役に立つよりよい紙面づくりを目指しており、皆さまが実践されている健康教育の参考にして頂ければ幸いです。ご覧になりたい内容やテーマ、また各園・学校紹介（例:当園では、健康教育の一貫として、このようなことを行っています等）、そのほかご意見・ご感想がありましたら是非お聞かせください。
なお、お問い合わせは下記の連絡先までお願い致します。

お問い合わせ・ご連絡先

河合薬業株式会社　「健康教育®」編集部

〒164-0001　東京都中野区中野6丁目3番5号
TEL：03-3365-1156（代）　FAX：03-3365-1180
E-mailアドレス：genkikko@kawai-kanyu.co.jp
ホームページアドレス：http://www.kawai-kanyu.co.jp

健康教育® No.163
2011年9月発行

発行:河合薬業株式会社
東京都中野区中野6丁目3番5号
TEL.03-3365-1156(代) FAX.03-3365-1180